

日本豪雨水害被災地巡回訪問記

日 時:2018年7月29日(日)~8月2日(木) (7月29日、8月2日は移動日)

訪問者: 長倉 望(新潟教会)

同行者: 新井純牧師(世光教会)・柴田信也牧師(八幡ぶどうの木教会)

(以上、京都教区派遣)

訪問先: 愛媛県(四国教区) 広島県(西中国教区) 岡山県(東中国教区)

◆ 7月30日(月) 愛媛県(四国教区中予・南予分区) 訪問

8時50分、松山空港着。松山教会上島一高牧師、新井純・柴田信也牧師と合流し、上島一高牧師の案内で四国教区南予分区の被災地を巡回訪問。

【訪問先①】 大洲教会・大洲郷土館ユースホステル

一級河川の肱川が氾濫し、洪水被害のあった大洲を訪問。市街地は、1階部分のがれきをかたづけている店舗がみられるものの、町全体のがれき等は撤去され、被災の様相はそれほどめだちませんでした。中古車販売が盛んになさっていました。

大洲教会、松井暁郎牧師は不在。在日大韓教会関西地方会からのボランティアの宿泊場所として提供される予定の、大洲郷土館ユースホステルを訪問。オーナーの赤松一郎さん(86歳)・赤松玲子さん(85歳)、そして自宅が被災し、このユースホステルに避難している藤田佳子さんと面談しました(いずれも大洲教会員)。

ユースホステルは今年の5月に営業を終了していますが、KCCが8月中4回にわたって、ここをボランティアの宿泊場所として、主に社会福祉協議会のボランティアに人材を送る計画をしているとのこと。

ただし、赤松さんご夫妻が、もはやユースホステルは営業がむずかしいご年齢であるため、受け入れに関しては相当の負担がかかることを上島牧師は心配をしておられ、誰かサポートする人を配置できるか、場合によっては別の場所にしてもらうことも含めて、大洲教会牧師と相談する必要がある、とおっしゃっていました。

避難されていた藤田さんのお話では、ご自宅のある地域は昔から水害に見舞われる地域だったが、これほどひどい水害(1階部分がすべて水没)は初めて。夜じゅう、1階部分で流されているタンスが壁にぶつかる轟音が怖かった、とのこと。3週間たって、やっと話ができるようになってきた、と赤松さん、藤田さん共におっしゃっていました。

ユースホステル、藤田さん宅周辺を視察しましたが、ここはまだ瓦礫が道路わきにつみあげられ、市街地とは違った被災の様相を呈していました。



▲大洲ユースホステルで赤松さんご夫妻、藤田さんと

【訪問先②】三間伝道所・山下ヨシエさん（三間伝道所会員。99歳。故清家リツエ牧師の姉）宅、伊予吉田教会訪問

三間伝道所と牧師館を訪問しました。知花先生にはお会いできませんでした。教会から徒歩5分程度の場所に賃貸物件を「牧師館」としていたが、そこが床上浸水の被害を受け、現在知花牧師ご家族は三間伝道所で生活をされているとのこと。今後も、教会を一部リフォームしてそこを牧師館としたい、との要望がなされているとのことでした。



▲山下ヨシエさんと上島牧師

三間伝道所の山下ヨシエさん宅を訪問。神崎牧師が洗礼をうけた故清家リツエ牧師のお姉さまであり、現在も交流が続いていることから、立ち寄ってもらいました。今年数えて100歳を迎えるヨシエさんの顔にも、被災の苦勞がにじむも、気丈に生活しておられました。三間一帯は断水が現在もつづき、入浴等ができないこともあり、役所の訪問の方が、体をふくシートや手をふくための除菌シートなどを配っておられました。

伊予吉田教会は、現在、信徒1名の教会。床下浸水の被害を受けたとのこと。玄関わきに泥かきのための道具が置いてあり、四国教区のボランティアによって、教会の庭や会堂周辺の泥かき作業がされている様子が見えました。床下浸水による建物被害の状況については、まだ把握されていないとのことでした。

教会前の役所の広場には自衛隊風呂や給水所が設置されており、また途中立ち寄った道の駅には集積されたごみの山がうずたかく積み、被害の大きさを物語っていました。

【訪問先③】吉田町立間（たちま）地区 卯之町教会信徒宅訪問

山間の集落に流れる河川沿い、および、山間部からの土石流によって甚大な被害を受けていました。山の斜面にはミカン畑が広がり、一部崩落しているところも見受けられました。かなり大きな被害が集落全体にあるがすべて埋まっているところが未だあり全容は不明な様子。農道のような生活道路も土砂に埋まり、7月15日頃ようやく車の通行が出来るようになった状況で、未だ工事が続いています。地区内の災害死者はなかったものの、高齢・離農などの潜在的課題もあり集落の存続が危ぶまれるかもしれない、とのこと。卯之町教会信徒宅からは、ボランティアのお願いが四国教区に出されており、訪問翌日には教区有志のボランティアに入る、とのことでした。



▲暗渠の上を土石流が襲った

その後、野村教会を訪れた後、松山教会に帰りました。

◆ 7月31日(火) 広島県(キリスト教会広島災害対策室呉ボランティアセンター・安浦地区・西中国教区)訪問

【訪問先①】キリスト教会広島災害対策室呉ボランティアセンター

7月31日は松山からフェリーで呉にわたり、広島キリスト教災害対策室(広キ災)が開設した「呉ボランティアセンター」を訪問しました。インマヌエル呉キリスト教会が事務局になっており、同教会の内山忠信牧師(センター長)から説明を受けました。説明の概要は以下の通りです。



▲呉ボランティアセンター

・2014年広島土砂災害を契機に「広島宣教協力会」(31加盟協会・団体)に設置された「キリスト教会・広島災害対策室(広キ災)」の現地ブランチとして7/12にボランティアセンターを立ち上げ、活動開始。

・呉市内超教派20教会が40年間にわたって牧師会で交わりを続けてきたことがボランティアセンターの立ち上げの土台となっている。牧師会は年間5

回程度行われ、毎年協力して市民クリスマスも開催してきた。インマヌエル呉キリスト教会の山内牧師が、今年度たまたま牧師会の会長だった。

・2014年の土砂災害の際には、教団の教会は広キ災の活動には加わっていなかったが、今回は、日常的に行われていた呉の超教派の教会の交わりをベースにしているので、呉平安教会・呉山手教会の教団2教会も参加している。

・国際飢餓対策機構・クラッシュジャパン・サマリタンズパース、救世軍などキリスト教系団体による物資および人的支援が大きく貢献している。国際飢餓対策機構はボランティアセンターに張り付く事務スタッフを派遣してくれ、ボランティアセンター立ち上げに大きな支えとなった。

・事務局・ボランティアセンターとなっているインマヌエル呉キリスト教会の他、4教会がボランティアの宿泊場所を提供している。(例えば、呉平安教会は、男性ボランティア10名を定員に教会の2階部分で宿泊場所を提供している)

・インマヌエル教会が位置する市役所周辺旧市内部も床上浸水39軒の被害があり、土埃が舞っていたが、呉中心部より離れた郊外、旧郡部沿岸地域に被害が点在し、坂地区、安浦地区、安芸津地区、川尻地区などなど広範囲で特に天応地区(呉市北部)被害甚大。川内地区一部では今も断水が続く。

・教会員宅、教会員のご家族宅など、教会を中心とした支援活動を行っているが、市民クリスマスで献金をお送りしている福祉施設や、教会員宅の近隣のお宅など、教会の地域への関わりを考慮しつつボランティア派遣を積極的に行っている。

・2014年の広島土砂災害の際には、実際に現場で必要な時期からかなり遅れて献金が届き、献金の使い道に困った(後述のとおりその残金で防災士資格取得)、という経験があり、「献金は後からついてくる」との考えの元、1250万円程度予算規模で、ボランティアセンターを運営している。中でも、トラックやパ

ワーショベル等の重機とオペレーターを 6 週間 600 万円で雇って、被災状況の一番ひどかった天応地区（広島市と呉市の中間）に派遣している。これもまた、14 年の広島土砂災害の際に、「人手でできることの限界」を感じたがゆえ。また、ガソリンエンジンで動く高圧洗浄機を 30 台入手。今後に備えて保管倉庫を広島市内の教会に立てることも計画の中に含まれている。また、必要などころには、高圧洗浄機を差し上げてよい、との考え。

・2014 年の土砂災害の際の支援金残金で、牧師が 6 名防災士資格を取得した。そのことによって、社会福祉協議会の信頼を得ることや連携をとることがスムーズにいった。

・前述の重機の派遣については、救世軍呉教会(吉田中隊長)が、福祉施設による地域への認知があり社協や町内会長さんたちの協議会にも出席。その中で、行政が入らない個人宅等の瓦礫泥カキ撤去の要望から実施されたもの。

・献金については、予算の 1200 万円の内、800 万程度はすでにめどがたっており、最終的には大丈夫だろう、との見通し(14 年の広島土砂災害についても 1000 万円以上の献金が寄せられた)。関東教区が西中国教区にお渡しした見舞金 50 万円は、そのまま呉ボランティアセンターに捧げられた。

・現在は、ボランティアの人員不足の方が大きな課題。キリスト教のボランティア、ということで、ボランティアに参加する際には、牧師の推薦が必要。

・教会が中心となったボランティアセンターの運営については、「4 週間限定」とし、8 月 10 日に活動は終結させる。それ以上は、教会の負担が大きすぎるため。ただし、被災状況が改善されない中でボランティア派遣を中止することはできないため、センター機能、宿泊場所、スタッフ確保など、継続して被災支援を担ってくれる団体や協力体制を構築し、働きを受け継いでいきたい、とのこと。

【訪問先②】安浦地区 呉平安教会信徒関係者宅の泥かき作業中の小林克也牧師訪問

広島県は、山間を流れる川の河口にできた扇状地に町が形成され、街が海岸線にそって点在するような地形。そのため、必ず街には川がセットになっており、安浦地区もまた、野呂川の河口に形成された街。豪雨による野呂川の氾濫に加え、限界を超えた野呂川ダムの放流によって、大きな被害を受けた。交通も遮断され、数日間、陸の孤島状態となったため、報道もされず、被害が知られるのが遅れた地区。安浦駅前周辺部は 2m ほどの浸水被害。町全体にまだ瓦礫が残り、被災地域であることが一目でわかる状態（視覚的な被災の“わかりやすさ”は南予とは対照的）。

小林克也牧師は、ボランティア 4 名と共に床下に潜っての泥カキ作業、高圧洗浄機で庭に溜まっていた泥の除去作業に大粒の汗を流しておられた。屋内日陰ではあっても、日中の暑さに加え乾燥泥の砂埃でマスクをつけての作業は疲労度を高めているなか、作業の手を止めて、小林さんが現況を丁寧にお話くださった。

・1階部が冠水し畳を揚げ、床板をはがした家屋では生活が出来ない家主さんは教会員である娘宅で暮らしておられるとのこと。もちろん隣家を含め同地域住民の方々も浸水被害を受けていることから、関係者宅以外の支援にもボランティアが広がりつつある。(たとえば、ボランティアの車を止めるために、駐車スペースの協力をお願いした、近隣のお宅の泥かき作業も請け負う、など)。今回の被災とその支援を通して、地域との新しい出会いをされているとのこと。



・呉ボランティアセンターの活動は8月10日をもっていったん閉じるが、地域との関係ができてきている以上、それで「はい、さようなら」とはいかない、けれども、こんな時にこそ、み言葉の励ましを受けたいと願っている人たちもいるため、教会がみ言葉を取り次ぐ働きにも戻らなければならない、との思いもある。

・安浦駅など土石流に呑まれたJR路線は、7月6日以来不通が続き9月～年内に順次運転再開の見通しではあるが、通勤通学時間が長くなることは生活が鈍化、混乱のため疲労・ストレスが大きく、平常を取り戻すためには何よりも運転再開が熱望されている。呉駅を経由し広島市内方面へ通勤通学する方の時間短縮するため、呉平安教会員も教会で避難生活を余儀なくされ、小林さんが細やかな生活支援にあたっている。

・小林牧師は、信徒宅の泥かきや地域への奉仕を含めて、「要するに、牧師としての働きをしているだけです」とお話を結ばれた。新井純牧師はかつて広島観音町教会を牧しておられたため、小林克也牧師との再会を、お互いに喜んでおられた。

【訪問先③】安浦を出発し、ボランティアの宿泊場所となっている呉平安教会を訪問し、状況を確認しました。

◆ 8月1日(水) 三原教会・三原愛光保育所 岡山教会 訪問

広島市内より安佐北周辺など各所で土石除去作業等による通行規制によるものとみられる渋滞が発生し、特に災害救援緊急車両(京都府消防局・自衛隊など)の往来が多く見られる中、新井純牧師が理事長を務めるキリスト教保育所同盟加盟教会・保育園である三原教会・三原愛光保育所を経由し、岡山教区議長の牧する岡山教会を目指しました。岡山県の被災地域については、交通事情が悪く、いったん入るとかなりの時間をとられるとの情報から、時間の関係で岡山については、東中国教区議長との面談のみとなりました。

【訪問先①】三原教会・三原愛光園保育所 訪問

所長・眞田右文さん(三原教会員)と面談、状況を伺いました。

・教会・保育所周辺の JR 三原駅付近の市街地は大きな被害はみられなかったため、支援物資集積所となって活動した。

・保育園舎併設の礼拝堂に床上浸水あり。河川氾濫による浸水ではないが、湧水によるもの。保育で園児も利用することから、フローリング床の消毒・洗浄、及び改修が急務となる、とのこと。

・断水により休所措置の期間(7月7~14日)、周辺部の被害の大きかった本郷地区で、避難所となっている生涯学習センター・図書室を拝借し、保育士ボランティアを募って「臨時出張保育所」を開設。他の幼児施設も休園、街も被災して危険な状態の中、泥かきをするにしても、給水所に並ぶにしても、子どもたちと一緒に連れ歩かなければならない状況の中、子どもを預かることで時間に追われる保護者への心身両面の支援として、大変喜ばれた、とのこと。子どもたちにも好評を得たが、保育再開によって活動は終了した。

・被災園児宅に「お道具箱」などの通園備品購入支援などを検討準備中。



▲三原教会礼拝堂

【面談】大塚忍牧師(東中国教区議長・岡山教会)、太田直宏総主事(YMCAせとうち)と面談。状況を伺った。



・東中国教区としては、超教派組織「キリスト教会・岡山災害対策室(岡キ災)」と連携協力し支援活動にあたることを決定、ミーティングに参加している。

・倉敷市真備地区の被災が甚大。但し、高梁市にも被害が出ていることを検討考慮する必要があるが、教会員を通じて支援に入るなどの具体性を見出せないで推移している。

・長期的展開については今後検討することとなるが、これまでも良好な関係を築いてきた「せとうちYMCA」との連携・協力を図って

いきたい。

・YMCAせとうちでは、現在、キャンプのハイシーズンのため、具体的なボランティア支援は行っていないが、被災したご家族の子どもたちをキャンプに招待するため、被災地域に広報を行っている。また、秋以降、ボランティアについて検討する。

その後、岡山教会、YMCAせとうちを後にし、帰路につきました。

※このレポートは、柴田信也牧師(元兵庫教区被災者生活支援長田センター主事)が作成した京都教区レポートを下敷きに作成しました。